第８回　校長会議あいさつ

R.5.10.24　稲垣

朝夕の涼しさとともに空気が澄んで、さまざまな活動に気持ちよく取り組める季節がやってきました。先週の研究発表会では、西野町小、平坂小、吉良中、いずれの学校においても、先生方の熱意に満ちた授業のもと、子どもたちの生き生きとした姿が随所に見られました。この研究成果を参考にして、各学校でも豊かな教育活動を展開し、児童生徒に力をつけてほしいと思います。

本日は、一点のみ、授業づくりについてお話しします。

本年度の学校訪問も、残すところ９校になりました。教育委員会では、毎年度、全ての児童生徒の様子、全ての教諭と常勤講師の授業を参観するようにしています。本年度も、全ての学校において、児童生徒の明るい挨拶に始まり、活発な発言や笑顔が多く見られ、日常を大切にした学校経営の確かさが窺われます。また、配慮を要する子ども等の対応についても、教育アシスタントを活用した適切な役割分担がされていました。これからも教職員全員の共通理解のもと、組織的に対応していく体制を整えていただきたいと思います。

授業については、各学校で定められた学習ルールのもと、全体として安定感が感じられました。また、学校訪問に向けて工夫を重ねた指導計画も多く、子どもたちが目を輝かせて学習する姿もしばしば見受けられました。

良い授業とは、とどのつまりは「楽しくて力のつく授業」です。つまらない授業が多いと学校は荒んでいきます。一方、子どもの心が働く楽しい授業は学校を温かくします。また、力のつかない授業は子どもの将来を暗くしてしまいます。子どもたちが未来を拓いていくためには、学校はそのための力を見据えて身につけさせなくてはなりません。

「楽しい授業」は、多分に学級経営に支えられています。子ども集団の人間関係が良好であると、学習活動は自然と活性化し、朗らかになります。しかしながら、学級経営は良い授業の必要条件ではありますが、十分条件ではありません。授業内容に子どもたちの好奇心や探究心を沸き立たせるものがないと、本当の楽しさは得られません。また、「できた」「分かった」という達成感も重要です。さらに授業で言う「楽しい」は、口角泡を飛ばして話し合いすることも、ひたすら創作

に没頭することも「楽しい」ことになります。学校訪問を通じて、「楽しい」については、多くの学級で意識された授業づくりがされていることを感じました。

「力のつく授業」については、再確認したい点があります。学校教育で育てるべき「力」は、学習指導要領に示されている、能力や感性、心情のことです。学校訪問では、指導案の簡略化に伴い児童生徒観や教材観が省かれたこと、あるいは単元目標が指導書に準じた総花的な記述になりがちなため、本単元で身に着けさせるべき力の特定があいまいになり、その結果、本時の学習が活動ありきに流れてしまい、力の育成が心配されるケースもわずかながら散見されました。

授業は力をつけることが目的ですから、学習場面によっては、一方通行の教え込み型の授業も可能です。しかし、教え込み型ばかりになってしまうと、子どもたちは受動的になり、自ら学ぶ姿勢は育ちません。また、課題を見つけ、その解決法を模索する追究力にも勢いが出ません。問題解決力は、文科省が近年強く提唱する教育価値であり、総合的な学習をはじめプログラミング学習を重視する所以でもあります。授業研究の方向として、問題解決プロセスを含む授業づくりに努めていただきたいと思います。

また、タブレットの導入目的は、言うまでもなく学習の効率化と個別最適化ですから、これは学力を向上させるために最大限活用したいものです。今後、本市においても、ＩＣＴ委員会を中心に、各校においても積極的な実践研究が進むようにお願いいたします。

教育委員会としては、学校訪問は言うまでもなく、市教研や教科指導員会とも連携しながら、「楽しくて力のつく授業」の具現化に向けて、尽力していきたいと考えています。